

フランス領ポリネシア

井上 晃 男

1. 領土など

フランス領ポリネシアは、フランスの海外領土の1つであり、約130の島々が5つのグループを形成する。これらの島をあわせた陸地総面積は4,000km²、それを取り巻く海域面積は約1,000倍の4000,000km²であり、南緯7度～29度、東経131度～156度の広い範囲に展開する。首都パペエテは、フランス領ポリネシア全体のほぼ西端にあたるタヒチ島にあり、シドニーから5,400km東方、カリフォルニアから6,500km南西に位置する。

フランス領ポリネシアは、ソサエティ諸島（タヒチ、モーレア、ライアテア、ボラボラなど）、マルキーズ諸島（ヌク・ヒヴァ、ヒヴァ・オアなど）、ツアモツ諸島（ムロロア、ランギロアなど）、マンガレバ諸島（マンガレバ、タラバイなど）およびオーストラル諸島（ルルツ、ツプアイなど）からなる。

2. 人口・宗教など

1985年の人口は、172,080人であり、ポリネシア人70%、ヨーロッパ人15%、ポリネシア人とヨーロッパ人の混血8%、中国人7%。約120,000人がタヒチ島に居住し、パペエテに住む人の数は約100,000人。すべてのポリネシア人とほとんどの中国人の国籍はフランス。公用語はフランス語とタヒチ語。全人口のほぼ半数がプロテスタント、ほぼ3分の1がカソリックであるが、ポリネシア人はすべてカソリック教徒であると言ってよい。

3. 議会・教育など

フランス領ポリネシアでは、5年に1回、領域議会（Territorial Assembly）議員の選挙があり、30人が選出される。この議員の互選によって、内閣に相当する7人の政府評議員（Government Council）と副議長である大統領（President）を選ぶ。しかしながら、この上に、フランス大統領によって任命された高等弁務官（High Commissioner）がいて、彼が議長として政治、経済はもちろん、たとえばテレビ局の認可にいたるまで、ほとんどすべての実権を握っている。フランス国会へは、国民議会2人、元老院1人の議員が選出される。

教育は小学校と中学校における義務教育（8年）が中心であり、ポリネシア人でこれ以上の教育を受けるのは、ごく限られた若者が、タヒチ島内にある、教師を養成するための学校（Teacher's Training School）や職業訓練高校（Technical High School）さらには最近開校したばかりのタヒチ大学へと進学する。一方大部分の中国人とフランス人の子女は、政府の援助を得て、フランス本国の大学へと進学する。このような傾向は、少なくともこの40年来続いており、ポリネシア人は専

ら島内にとどまり、漁業や農業に従事するか、サラリーマンとして、下級の仕事に従事しているのが現状である。

4. 予算・産業など

通貨は太平洋フラン（CFP）（1 フランスフランは18.18 CFP に相当）。予算の大部分はフランス本国から与えられるものによる。産業としては、農業や漁業がその基盤としてあるが、前者はコブラ・コーヒー・バニラなどを細々と輸出しているにすぎず、野菜・果物・肉の大部分は輸入にたより、また捕獲された海産物はすべて領内で消費される。観光がもつとも重要な産業であり、南北アメリカやヨーロッパ、オーストラリア、日本などから毎年約20万人が訪れる。しかしどの大陸からも遠いことや、サンゴ礁と清澄な海以外にはセールスポイントがないことなどの理由から、観光客は近年減少の傾向にある。アメリカからの観光客が約50%を占め、その大部分が退職した老夫婦であるのに対して、日本人旅行者のほとんどは新婚旅行などで訪れる若い人たちである。成田からの直行便（週2便。JALとエアフランスとの共同運航。パペエテまで11時間）に乗ると、周りが新婚のアツアツ・カップルばかりで、目のやり場に困り、本を読んでも今一つ頭にはいかない。さらに、3人掛けのシートの一つにこのようなカップルと相席ともなると事態は最悪であり、到着まで永いこと、きついこと。その苦行の分、パペエテ空港のカラッとした暑さの心地よいこと。成田からの他、オークランド（ニュージーランド）、ナンディ（フィジー）、ロスアンジェルス（アメリカ合衆国）、ヌメア（ニューカレドニア）、サンチャゴ（チリー）などから直行便があるが、発着時間が深夜や明け方であり、そのためバスやタクシーが利用し難く、ツアー以外の一般の旅行者には極めて不便である。日本とパペエテの時差は19時間で、日本時間の昼の12時は、タヒチでは前の日の夕方5時。

5. 自然条件など

タヒチ島の年平均気温は約27℃、年平均降雨量は約1,800mm。11月～3月は雨期であるが、乾季・雨季を通してほとんど毎日シャワー（ごく短時間の強い雨）があり、その雨の中、子どもたちが石鹸を体中にぬりまくって、はしゃぎ回っている光景をよく見かける。子どもの心理をうまくついた親の知恵勝ちといったところだろうか。果物としては、マンゴ・パパイヤ・グレープフルーツ・パンの実・バナナ・パイナップルなどがそれぞれの家の前庭や畑で栽培されているが、実りすぎて、地べたのあちこちに落ちていても、絶対にタダでは呉れない。金を払って安く買おうとしても、結局市場よりも高くつく。かれらはちょっと不精ではあるが、誰も彼も商売上手である。

6. 歴史

フランス領ポリネシアを最初に発見したヨーロッパ人はマゼランであり、最初の世界一周航海の際の1521年に、ツアモツ諸島のプカプカ島を発見した。それ以後何人かの航海者があちこちの島を

発見した記録はあるが、1767年になってワリスがタヒチの領有権をジョージ三世の名において主張した時から、一躍注目を浴びるようになった。翌1768年にはフランス人ブーゲンビルが、さらに1769年にはキャプテン・クックが訪問し、タヒチ島に長期間滞在して金星の観測を行うとともに、付近のファヒネ、ライアテア、ボラボラ島などを発見した。ロンドン伝導協会の船がタヒチに到着したのは1797年のことでありそれ以来プロテスタントの布教が進んだ。イギリス勢力と結ばれたポマレ家は、タヒチ島近辺の統一に成功したが、カソリックの宣教に関連して、1842年フランスの保護領化を余儀なくされた。1877年、ポマレ女王は王位から身を退き、子息のポマレV世は1880年、フランス領オセアニアの名称で植民地となることを承認した。

第一次大戦の時には、パペエテ港がドイツ艦隊によって砲撃された。また、第二次大戦では、フランスが一時ドイツに降伏したため、微妙な立場に立たされたが、自由フランス軍について、戦後の1957年仏領ポリネシアの名称でフランスの海外領土の地位を得た。

7. 独立運動

フランス領ポリネシアの独立運動は、この海外領がフランス領オセアニアと呼ばれていた時代に、ポウヴァナア・ア・オオパによって始められた。1958年9月のフランス第5共和国憲法への賛否を問う国民投票の機会をとらえて、タヒチ共和国の独立を実現しようとしたが失敗した。またフランスが1966年にムロロア環礁で核実験を始めてから、フランス領ポリネシア住民の間の核実験反対運動と結びついた形で反フランス＝独立運動が展開されたが不成功におわった。1977年から、ポリネシア社会党が、独立を目指す独立要求政党イ・ア・マナ・テ・ヌアを中心に運動を進めているが、はかばかしい成果はあがっていない。

いずれにしても、フランス領ポリネシアの独立運動が突破しなければならない大きな壁は、核実験を対象とする援助を始めとするフランスの莫大な経済援助に依存しないで、どうすれば経済的に独立できるかである。めぼしい産業がなく、またそれほど大きな自助努力をしているようには見えないポリネシア人が独立するまでには、まだまだ永い道のりを歩まねばならないようである。

8. 雑 学

(1)コン・ティキ号 (Kon-tiki)：ノルウェーの人類学者トール・ヘイエルダールが、東ポリネシアに最初にやってきたのは南米インカ以前に栄えたインディアン種族であったという自説を証明するために、古代のインディアンが利用していたバルサ材と麻のロープで作った筏で、1947年4月28日に5人の仲間とペルーから太平洋に乗り出した。約100日後に、ツアモツ諸島のラロイア環礁に漂着し、これによって筏がポリネシアまで航海する能力があることは証明された。しかし、ポリネシア人の先祖がインディアンであることが証明されたわけではないとしてあまり評価をされていない。なおこの時の筏や航海記は、ノルウェーの首都オスロのコン・ティキ号博物館に展示されている。

(2)戦艦バウンティ号の反乱 (Mutiny on the Bounty) : 1788年イギリスの軍艦バウンティ号が、艦長ウィリアム・ブライ中尉に率いられて、西インド諸島に移植するためのパンの木を求めて、タヒチに約5カ月滞在した。この長期間の滞在中に、艦内の規律は乱れ、また乗組員と現地人とのいくつかの恋愛事件の解決をめぐる、一部の乗組員が艦長に対して極めて強い不信感を抱くにいった。1789年4月、その帰途のトンガ付近の海域で、ブライ中尉以下13人は、ボートに移されて漂流させられる運命となった。

反乱者の首謀フレッチャー・クリスチャンらは、バウンティ号でタヒチに立ち帰り、その南方約500kmのツブアイ島に定住しようと試みた。これに失敗すると、タヒチに引き返し、それ以上クリスチャンと行動をともにすることを拒否した16人を解放した後、他の8人とともに新たな定住地を求めて出港した。

一方、ブライ中尉らは運良くインドネシアのチモールに漂着し、英国に帰国した。彼から反乱のニュースを聞いて、イギリス海軍はエドワード・エドワーズを反乱者捕獲のために派遣し、彼は1791年、その任務を果たした。この話は、後に映画化されたが、その主役にあてられたマーロンブランドが、1960年に開港したタヒチ空港への第一便の乗客であり、彼はそれ以来タヒチがお気に入り、ポリネシア人と結婚(?)し、タヒチから15分ほど飛んだ所にあるテティアロア島を保有し、そこでホテルを経営している。

(3)ゴーギャン (Paul Gauguin : 1848-1903) : フランスの画家・彫刻家。後期印象派を代表する一人。彼の芸術家としての生涯は1883年、株式仲買人をやめて画業に専念することを決意したときに始まる。ヨーロッパの腐敗した文化、社会にあきあきしたゴーギャンは、その妻と5人の娘を捨てて、失われた楽園を求めて1891年タヒチに旅立った。それ以後一時は帰国したものの、パリで開いた最後の展覧会は不評で絵の一枚も売れず、またその妻からも追われるようにして、再度タヒチに帰ってこの地にとどまり、畢生の大作「我々はどこから来たのか、我々は何か、我々はどこへ行くのか」(1897)をはじめとして、人間存在の意味を問いたず数々の作品を発表した。マルキーズ諸島のヒヴァ・オア島アツオナで失意のうちに死去した。この島には彼の墓があるが、訪れる人は少ない。現在彼の作品を展示したゴーギャン美術館がタヒチ島にある。

(4)ムロロア環礁 (Mururoa Atoll) : タヒチ島の東方約1,200kmの、フランス領ポリネシアのほぼ東端に位置する27×13kmの環礁。1960年代の中頃からフランスの核実験の基地として使用されている。アルジェリアのサハラで行っていた核実験が、アルジェリアの独立によって中止せざるを得なくなったため、自国の海外領でもっとも僻地である仏領ポリネシアの孤島に、その代替地を求めた。1966年7月に始まった大気圏内核実験は、1972年末には30回に達した。世界中の非難の中、フランス政府は1975年、核実験を地下(海面下)で実施するようになった。今年(1995)就任したばかりのシラク大統領が、この1年間に8回の地下核実験を行うと宣言したことから、オーストラリアやニュージーランドを中心に反対運動が起こっている。またグリーン・ピースの船がムロロアの制限水域に入ったとして、フランス軍がこれに催涙ガスを浴びせて域外に放逐したのはやり過ぎではな

いかと非難を浴びている。タヒチ島でもごく小規模の反対デモや集会が開かれているが、フランス政府が核実験を行う代償として、タヒチ政府に支払っている巨額の予算、さらに、労働機会が特に少ないポリネシアで、高収入が得られる核実験関係の仕事に多くの人達が従事していることなどを考えれば、現地の反対運動がこれ以上盛り上がるとは想像し難い。

参考文献

『ブリタニカ国際年鑑』 ティービーエス・ブリタニカ年鑑, 1995

Know all about Tahiti, Multipress, 1977

The Tahiti Handbook, Jean-Louis Saquet. Avans et apres, 1989